

四万十に伝わる“龍伝説”

清流通信読者の皆様こんにちは。

2012年、来る年は辰年ですが、今回の清流通信は、四万十に伝わる“龍の伝説”についてお伝えしたいと思います。



津野町不入山稲葉洞・梶原町竜王宮
 源流から河口までドラゴンラン・穿入蛇行



ものの本によれば、“日本の龍”は、様々な文化と共に中国より伝来し、元々日本にあった“蛇神信仰”と融和したものだという。古来、雨を操り大地を潤す“豊穡のシンボル”としての蛇信仰があった日本では、この蛇が、中国から伝わった“神獣・霊獣”の龍と合わさって、水を司る“水の神”として農業と結びつき、雨乞い祈禱の対象となり、水神・海神として民間信仰されてきたのだという。

そのため、日本各地には、“水の神”“海の神”としての、龍にまつわる伝説や民話が数多く残されているようだ。そして、ここ四万十川流域にも、龍にまつわるたくさんのお話が、今に伝えられている。

その1：四万十川源流域 不入山、稲葉洞の白龍様の伝説 = 津野町

196kmの四万十川は、津野町的不入山（いらすやま）1336mの東斜面に源を発する。不入山は、読んで字のごとくで、藩政時代には土佐藩の御留め山として入山が規制され、その後も国有林として受け継がれてきたため、山頂付近には“深山幽谷”という形容がいかにもふさわしい手付かずの自然が残り、植林で覆われた山腹は別名“黒森”と呼ばれるように黒い姿をたたえて、四国カルストの山々を背景に佇む。

その源流点への登山口、源流の碑のある場所から下ること約4km、堂海公園たもとに“四万十源流センターせいらんの里”の建物が見えてくる。そして、その“せいらんの里”脇を流れる四万十川のほとりに、入口に小さな祠が祀られた鍾乳洞、“稲葉洞”がある。今回は、そこに伝わる“白龍の伝説”をご紹介します。

延長150mの鍾乳洞“稲葉洞”は、別名“龍王洞”とも呼ばれ、日本三大鍾乳洞の一つ高知県香美市にあるその名も“龍河洞”より規模は小さいながらも、内部には美しい神秘の世界が広がっている。ここには2億2千万年前の、世界的にも珍しいとされるサンゴの礁（リーフ）と呼ばれる化石があり、専門家にとっても興味深い場所だという。

また、この鍾乳洞を通して流れ出る四万十川の水は、“せいらんの里”の名前の由来ともなっている貴重なカワノリ、セイランを育む。セイランは、四万十川流域では津野町の源流域と梶原町などで見られる緑藻類カワノリ科の植物で、関東以西の太平洋岸に注ぐ河川の溪流だけに成育し、高知県ではセイランと呼ばれ食用とされてきた。独特の歯ごたえがあり、水温が1年を通じて約15℃と一定した清流にしか自生しない珍しい植物だ。

その稲葉洞に、古くから祀られている“白龍様”の伝説とは・・・

この稲葉洞には、龍王様が棲んでいるという言い伝えがある。しかも龍の中では最も位が高いとされる“白龍”だという。そして、年に二回、全国の龍神様たちがここに集う。それは、今で言うところの“龍神サミット”である。その龍神様の頂点にあるのが、ここ稲葉洞に祀られている“白龍様”であるらしい。

「なに故、年に二回？」というような疑問はさておき、そこは、龍の形で蛇行し流れる“清流四万十川”の源流域にあるということだけで、“その話は否定したくない”と思うのは、私だけだろうか。

そして、年に二回、空を飛んでやってくる龍神様たちの姿を想像してみる。

やっぱり、龍神様たちは、この洞窟に集まって来るのに違いない。それを裏付けるかのような、稲葉洞の佇まいだ。第一、入口に龍の姿が見える、らしい。(→)

また伝説によれば、「この穴を奥へ奥へと進んで行けば、不入山の西側芳生野の“蛇ガ淵”に出る」と言われていたようだが、真偽の程はわからない。

その2：山と川、海を結ぶ 竜王宮 = 栲原町

栲原町の四万十川第二支流、四万川の支流である本モ谷川（おもだにがわ）と、中の川の合流点には、竜王宮（海津見神社）があり、この地には海の神である大蛇が女の姿でやって来たという伝説がある。

竜王宮には伊予や土佐の漁師の参拝が多かったということで、山中の神社の参道と社殿には、寄進された漁船や川舟を見ることができる。そこには、「山を大切にしないと、漁が無くなる」ということを知っていた 漁師達の思いが垣間見える。

そして海の神・漁の神を、あえて最上流部の山奥に祀り、参拝を繰り返すことで、山と川、そして海までも 一体的に捉えてきた 人々の生活や文化が、窺い知れる。

その3：四万十川、現代の強者たちの“ドラゴンラン” = 源流 から 河口 まで

これは現代の話。今年で7回目となった、四万十川流域の源流から河口までのツアーリズム“四万十ドラゴンラン”。四万十ガイア自然学校主催、四万十楽舎共催で開催されるこのイベントは、四万十川源流から河口までの全行程を「自転車」「カヌー」などで駆け抜け、田舎との交流や自然との触れ合いを楽しんでもらおうというもの。

ドラゴンランの名前の由来は？「四万十川を宇宙から俯瞰すると、穿入蛇行（下記参照）する気ままな流れは、まさしく龍のごとし！ このドラゴンの頭（源流）から尻尾（河口）までツーリングすることを、私たちは“ドラゴンラン”と名付けました。また、四万十川から立ち上る霧は、龍の姿に見えると思いませんか？」

それは、地元の人でも年に数回しか見られないという“龍の霧”。気象条件が整ったとき、四万十川の上を、まるで龍が泳ぐごとくに霧が流れる日があるという。四万十川は、やはりどこかで、龍とつながっているのかもしれない。

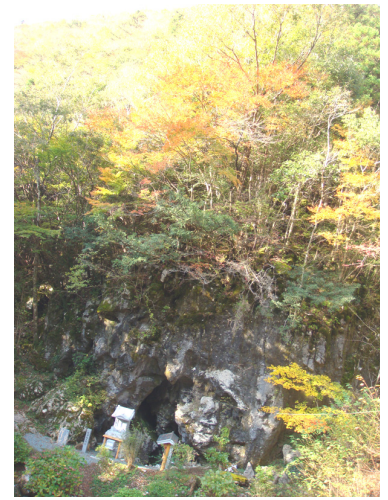
その4：龍のように、四万十川の“穿入蛇行”

日本の川は、一般的に、滝のように直線的に流れていると形容される。しかし、四万十川は、しなやかで美しく、かつ大きな蛇行曲線を描いて流れている。それは、四国山地が出来る前まで、四万十川は平野を自由に蛇行していて、その状態のまま地盤の隆起を迎えたと考えられているからだ。このように、蛇行状に屈曲する谷の中を流れる河川を指し、その蛇行形態を“穿入（せんにゅう）蛇行”と言うようだ。

その穿入蛇行する四万十川の流路延長 196km は、流域面積 2270 km²に比べ長く、河床勾配が緩いのが特徴で、また、年間を通しての最大流量と最少流量の比（河況係数）が非常に大きく、洪水に弱い体質を持っていることがわかる。流域の温暖多雨な気候は、森を育て清流を育ててきたが、一方で頻繁に河川災害を引き起こし、そのたびに人々は甚大な被害に遭ってきた。それ故、流域で暮らす人々にとって、“水を司る”という水神、海神そのものが、或いはそれらを崇めることが、その自然と折り合いながらここで生きていくための、一つの大きな“拠り所”となっていたことは、想像に難くない。 ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣ ♣

冬の四万十川は、穏やかに流れている。その流れは、どこまでもしなやかで美しい。

そして、この四万十川の流れのように、来る年が穏やかで幸多い一年であることを、私は祈らずにはいられない。



↑ 稲葉洞入り口の周辺 ↓

